集書日誌

払出本のこと、その他

高橋新太郎　学習院女子短期大学教授

このところ、明治女流文学について喋る破目になり、架蔵の関係文献に当っているのだが、十年近く未整理のままの書庫故、探すのに難渋した。探し当てた一冊に、お目あての中島湘煙女史・紫琴女史・大塚楠緒子・花圃女史等の作品が収められている『文藝倶楽部』臨時増刊「第二閨秀小説」（明治30年1月）があった。数年前に神田の古書展でたしか千円で求めたものだが、汚れ本で表紙に分類番号のラベルが貼附されているので、どこかの払出本であろうと別に気にもとめずにいたのだが、今回改めて見たところ、裏表紙の内側の隅にも孔版印刷の整理票が貼ってあり、岩波書店附属図書室・昭和15・10・12受入・講入と記してあるではないか。払出印は見当らない。通常、公共機関等であれば、除籍印もしくは払出印が押してある。例えば架蔵の『藝文』明治35年8月号は、平田禿木・川尻清潭・戸川秋骨・依田学海・森鷗外らの日本橋倶楽部での「金色夜叉合評」会の採録があり、紅葉のコメントも付されて重宝しているが、これには表紙裏に楕円形の東京都立日比谷図書館昭和39・10・5日附の「払出図書証明」印が押してある。『広辞苑』にはいささか関わったものの岩波書店附属図書室の概要すら知らないが、どんな経緯で流れたものか、なんとなく落ち着きの悪い気分である。そんな折も折、親しい本仲間から電話があって、古書展で猪野謙二著『日本文学の近代と現代』（未来社）の函付美本を割安で手に入れたが、よく見たところ、旧蔵者の名前のほかに某大学のゴム印が押してあったため、どうしたものかとの相談があった。旧蔵者はアメリカ文学研究者でその大学に長く勤めた後、先年故人となった人であった。猪野さんも十年近く専任教授として親しんだ学校である。話の様子で、これは個人研究費での購入図書と見当がついた。非課税扱いとの絡みで、退職時に大学に置いてくるのが普通だが、とかく紛れてしまいがちのものだ。猪野さんの全著書がその大学に所蔵されていることを知っていたので、本仲間には、そのまま愛蔵するのが良いと答えた。

十四、五年程前に、神保町の書店の平台で購った本が国会図書館の蔵書だったので送付して礼状をもらったことがあったが、再入手が可能な本であっただけに、事故本として処理後の事であったとしたら有難迷惑であったのかも知れないとも思う。岩波の場合は、いかがなものであろうか。